



TITLE:

梁漱溟の村治論

AUTHOR(S):

菊田, 太郎

---

CITATION:

菊田, 太郎. 梁漱溟の村治論. 經濟論叢 1941, 52(4): 501-508

ISSUE DATE:

1941-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/131519>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷二十五第

月四年六十和昭

## 論叢

大島貞益とその思想……………

經濟學博士 本庄榮治郎

日本經濟の再生産機構の研究のために……………

經濟學博士 柴田敬

管子の經濟思想……………

經濟學士 穗積文雄

## 研究

アダム・スミスの自然的自由……………

經濟學士 白杉庄一郎

中小工業統制組織と金融問題……………

經濟學士 田杉競

輸出向絹織業の確立……………

經濟學士 堀江英一

## 說苑

所得の分配と累進税……………

經濟學博士 汐見三郎

モンテスキューの經濟思想……………

經濟學士 河野健二

梁漱溟の村治論……………

經濟學士 菊田太郎

## 附錄

彙報

外國雜誌論題

## 梁漱溟の村治論

菊田 太郎

事變は長期建設の段階に入つたと稱せられるが、この建設計畫に於いて、農村が大なる比重を占める支那特に北支に關しては、農村の復興乃至建設が基礎的な重要性を持つ。これは今更云ふまでもなく自明の事柄のやうであるが、現在農村の治安並に經濟的復興の完全ならざることが、都市並に鐵道沿線の經濟を如何に畸形にし、新秩序の形成並に經濟建設を如何に阻害しつつあるか、蔣系軍並に雜軍の肅清された跡が如何に共產黨の地盤化しつつあるかを見ると、特に痛切に感ぜられるのである。

支那の地方農村の復興乃至建設工作の第一着手が軍事的肅清たること、新民會の活動が相當の効果を擧げてゐることは、既に周知の如くである。併し、軍事的

肅清を何時までも繼續することは殆んど不可能であり新民會の活動には形而上的にまた形而下的に今少しく具體的な内容と與ふべきではあるまいか。かく考へ來ると、農村の復興を、過去何千年かそれによつて存続して來た、農村自體の云はゞ自然的な救治力に放任すれば知らず、何らかの工作を行ふとすれば、實情に即した具體的な建設計畫の樹立實行と、かゝる計畫の基礎たり得、また地方農村の民心を維持するに足る思想を確立することが、何よりの要請となる。そして、農村に關する思想乃至これを基礎とする建設計畫には、從來支那に存在しない新しいものを與へるのも一案だらうが、近時の支那に存在し、既に若干の効果を擧げ將來についても期待し得るものを取上げ育成することが、一層適切ではないかと思はれる。この意味に於いて、本稿では梁漱溟の村治論を考察の對象とした。

近時の支那に於いて農村の復興、或は、農村には興隆時代はなかつたからと云つて、農村建設を主張する人々には、二潮流が區別された。即ち、その一は、都

市を中心とする商工業を振興し、その經濟力によつて農村を救済すべしとするもので、吳景超を始め、雜誌「獨立評論」に據る人々、他は、先づ農村の建設を行ふべく、これを基礎としてこそ商工業の發達をも期待し得るとするもので、こゝに見る梁漱溟、定縣に平民教育促進會を興した晏陽初、無錫教育學院の高踐四などがこの傾向を代表した。<sup>1)</sup>この内前の立場は差當つての農村工作の基礎とはなり得ず、支那經濟全般に對する意見と見做すべきものであらう。次に、後の農村建設を主張する人々の中で、梁漱溟及びその系統が如何なる地位を占めるかと見るに、梁は民國十八年一月北京に雜誌「北平村治月刊」を創刊し、同年冬「河南村治學院」を創建、農村建設に當るべき人材を養成した。翌年十月故あつて之を停辦し、二十年山東省政府主席韓復榘に招かれて、研究事業を重視する意味から「山東鄉村建設研究院」と命名された機關を主宰し、その趣旨として、(一)支那社會が現在切實に要求し、且つ有し得べき組織方式の研究實驗、(二)鄉村自救意識の

啓發、(三)知識階級回鄉運動の唱導、この三條を掲げ本院所在地たる鄆平、分院所在地たる荷澤の二縣を實驗縣とした。河南村治學院に學んだ人々が同學會を組織し、河南北部では汲縣、南部では鎮平を中心に活動した外、それ〴〵郷里に歸つて活動する人々が相當あつた。<sup>2)</sup>従つて、農村建設を主張する人々の組織する鄉村工作討論會が、民國二十三年十月定縣に開いた集會に於ける出席者百五十餘名を、系統によつて區別するとき、平民教育促進會の系統が最も多くて三十四人、次は梁系統の十八人であつたと云はれ、大體その地位を窺ひ得る。

晏陽初・李景漢らの定縣を中心とする平民教育促進會の活動が、詳密な社會調査の結果を公表してゐる關係もあつて、廣く知られてゐるに對し、梁漱溟の思想並に活動は、殆んど知られてゐないやうである。併し西洋・印度に對比しての支那文化の根本的な解釋を基礎とし、實際工作の經驗によつて裏付けられた彼の所論には相當尊重すべきものがある。勿論、時勢を慷慨

1) 千家駒、中國の岐路(評鄆平鄉村建設運動兼中國工業化問題)(千家駒編、中國農村經濟論文集、p. 37—39)。  
2) 梁漱溟、山東鄉村建設研究院工作報告(鄉村工作討論會編、鄉村建設實驗、第一集、p. 31—)及び山東鄉村建設研究院及鄆平實驗縣工作報告(同、第二集、

して自殺した父の血を享け、民國十六年前後には廣東で政治的に活動し、また、學問のための學問を本旨としないだけに、理論的に相當の問題を藏してゐるが、支那の文化並に社會に對する根本的な解釋から出發してゐるのが、注意すべき點と思はれる。

## 二

梁漱溟は云ふ。<sup>3)</sup> 支那人及びその文化・社會は、西洋人及びその文化・社會とは甚しく相違してゐる。人はやゝもすれば、支那人が未だ西洋人に及ばないと云ふけれども、及ばないのでなく、相違してゐるので、ある點では及ばない所か、既に過ぎて一段後の段階に入つてさへゐる。また、文化が質的に異なる結果、西洋の影響がなかつたら、支那には何時になつても純粹な物理學や産業資本主義は生じなかつたであらう。

支那人及びその文化・社會は、かく西洋と異り、著しい特殊性を有するため、從來の學問ではその性格を説明し得ない。例へば、マルクシズムを採る人々は屢々「アジア的生産様式」及び「東洋的社會」と云ふが

その本質について定論は見られず、支那に於ける封建制の有無は決せられてゐないし、オツペンハイマーの如きは、その國家論に於いて、支那の國家は例外的現象であるとして説明しやうともしない。かゝる支那の特殊性の内、最も顯著な二例だけを舉げて、(一)久しきを経て變化しない社會と、停滯して進歩しない文化及び、(二)人生に殆んど宗教が存在しない事實がある。この特殊性の究明は大きな問題であり、自分もこれを成し遂げたと自負はしないが、「東西文化及其哲學」中に述べた次の圖式は、ある程度役立つのではないかと云ふ。

即ち曰く、人間がその生活中に遭遇する問題、及び人間がこの問題に對して執る態度には、何れも三種類を分ち得る。詳言すれば、

第一の問題 人の「物」に對する關係に基く問題。

障礙は自然界であるから、當然解決し得る。

第二の問題 人の「人」に對する關係に基く問題。

障礙は他人の心であるから、解決し得るや否やは

P. 177—)。

3) 李榮翔、「鄉村建設」運動的評價(千家駒編、前掲、p. 58)。

4) 郭沫波著、神谷正男氏譯、現代支那思想史、p. 207。

5) 梁漱溟、中國民族自救運動之最後覺悟、p. 43 ff. 同、東西文化及其哲學、p.

各人の態度による。

第三の問題 人の「自己」に對する關係に基く問題。

障礙は自己の生命自體であるから、涅槃に入らねば到底解決しない。

第一の態度 客觀的な境地を改造し、満足を外に得る態度。

第二の態度 問題の解決を自己に求め、我が對者と調和融合するか彼我の關係を超越するか、要するに主觀を變換して、内に満足を得んとする態度。

第三の態度 問題の消滅をその解決と見、涅槃に入らねば満足は得られぬとする態度。

これら問題とこれに對する態度とは種々の組合せを考へ得るが、第一の問題と第一の態度と云ふ風に結合するのが自然の順序である。そして、西洋文化が第一の態度、印度文化が第三態度の所産であるに對し、支那文化は第二の態度を基礎とし、その特殊性、特に前述二大特徴の如きも、その結果に外ならぬとして、次の如く説明する。

宗教が要求されるのは、人が自ら恃まず、外に頼らうとする爲であるが、支那では夙く孔子の教化が行はれ、その倫理に關する教説が國家・社會を規律し、國民の殆んど總べてが前述第二の態度を執るために、宗教の必要が生じなかつた。天子より庶人に至まで、修身を最緊要事とし、反省し、節制し、策勉し、交讓妥協以て事を處理するならば、國家乃至政府さへ不必要とされた。

かやうに個人の修養努力が最も重要な事柄とされたから、特權を打破するためのデモクラシー運動も必要でなかつた。治者たる官僚は、民間から自己の才能努力によつてその地位に上り、罷められれば歸田する。農業・工業・商業に従事する普通人も、努力次第で比較的容易に産をなし得ると同時に、情勢の變化或は遺産の均分制によつて、聚積された巨富も直ちに分散し、固定した特權階級なるものは成立し得なかつたからである。

更に、外物の研究利用を重視せず、知足互讓を旨と

する段階に早く移つたから、商業・商人・商業資本はあつても、産業革命及び産業資本主義は自發的に生じ得なかつた。自然科学並に技術的知識が幼稚であり、飽くまで利潤を追求することは行はれなかつたからである。

### 三

かくの如く支那の文化・社會は西洋のそれとは異なるものであるに拘らず、支那を後進國と見、王道仁義の風とは相容れない霸道功利の方途に出でた爲に、利が未だ現はれない先に、固有の農業は破壊され、民生は窮迫するし、武力は他を害せず却つて自らを害し、現在の窮にして且つ亂なる情勢を誘致した。その救済は所謂近代國家の霸道功利の途に求め得ないと同時に、ソビエツトに倣ふ共產主義にも期し得ないとして、次のやうに云ふ。

マルクシズムでは、唯物史觀により生産力が發展して社會革命が生ずると云ふが、支那では生産方法が進歩せず、生産關係が展開せず、千年前も現在も殆んど

變らないのであるから、唯物史觀を適用し難く、殊に前述の如き特徴を持つ支那社會では、法律・政治その他精神的な生活過程が經濟關係を基礎とする上部構造とは云ひ難い。従つて、共產主義實行の具體的客觀的な根據は存在しない。

換言すれば、支那は歐洲中世のやうな封建社會でもなければ、近世のやうな資本主義社會でもないから、生産手段を所有する資本家階級と勞働力の賣却によつてのみ生活する勞働者階級とに截然分れて居らず、従つて、職業社會ではあつても、階級社會ではない。

具體的に云ふならば、先づ支那に於いては近代産業に屬する工人は甚だ少く、農民や苦力より上級に位すると考へられて居るし、手工業者は生産手段を有する上に、その組織する行會は他の職業に對しての利益擁護機關である。かくして工人・手工業者共に他職業のそれに對立するのみでなく、内部には地方主義が有力で、廬山の輻夫にすら九江幫と黃州幫とが拮抗してゐる位であるから、統一的な戦線は成立しない。

次に農民には、大小の地主、相當大規模の自作農から半自作農・佃農・雇農と、各種のものがあつて、その變化が激しくて、諺にも「十年高下一般同、一地千年百易主」と云はれる上に、見聞狭く、傳統的な觀念及び習慣が強力に、消極的な忍耐力が大きいから、社會革命などと云へば唯驚く許りであらう。

そこで革命を主張する人々は、被壓迫階級とよく云ふが、壓迫階級も軍閥・官僚・土豪・劣紳から一警官に至るまで、その地位を失へば直ちに被壓迫階級に轉落するし、土匪は一種の壓迫階級であるが、その出身は被壓迫民衆である。故に、共產主義による革命の確固たる基礎は存在しない。

次に、革命の對象が明瞭でない。一外國の帝國主義を斥けやうとすれば、他國の進出を招くし、國內的な對象は軍閥・貪官汚吏・土豪劣紳など「封建勢力」特に軍閥であらうが、軍閥は社會の根本秩序と云へず、寧ろ舊秩序が壞れ新秩序が生じない過渡期の所産であり、また、軍閥を打倒するため、新軍閥を呼入れるこ

とに終らう。

理論的に云つても、孫文の三民主義は古今中外の諸主義を集大成したと云はれるだけに、民權主義・民生主義の内容が極めて雜駁であり、共產主義は支那本來の生活に地盤を持たぬ外來思想たる結果、支那の國民黨ほど黨内に思想的紛糾が頻發し、國共關係ほど離合集散の轉變する例はない。

かくして、共產主義による支那農村の復興乃至救済は到底期待するを得ず、支那の文化・社會の特性に基礎を置く工作が要望されると云ふ。

#### 四

支那の社會に於いて農村が大なる比重を占め農村を復興乃至建設することが急務であるとして、梁漱溟は上述の如き思想的背景から、如何なる農村對策を提唱するか。

梁は云ふ。支那農村が文化的に政治的に、更にはまた經濟的に壓迫搾取されてゐるが、知識階級が農村を捨て都會に奔ることによつて、農村は愈々頑固愚昧を



加へ、愈々一般に理解されず、注意されなくなり、政治的壓迫及び經濟的搾取が更に甚しきを加へる。かく弱・貧・愚は互に他を甚しからしめるが、都市に奔つた知識階級自身も就職難に悩まされる。然るに、知識階級が農村に歸るならば、それだけで、既に、農村に知識を齎し、云はゞその耳目となつて愚昧を啓き、農村の實情を世に理解せしめる口舌たり得るのであり、更に、建設計畫の樹立實行に參劃するとすれば、腦髓の機能をも營むことになり、その効果は絶大である。

知識階級の回郷によつて啓發された農村に於いては如何なる建設工作を行ふべきか。建設すべき事項は多數に互るが、經濟、政治、教育或は文化の三方面に大別される。經濟建設工作は、林業・養蠶・牧畜・農産加工等をも含む廣義の農業生産の振興を目標とし、その手段として各種の合作、村營によるべきものとし、政治的建設工作は、眞の地方自治の完成を目ざし、教育乃至文化方面では、先づ一般民衆の知能を啓發すべき民衆教育より着手し、次に小學教育に及ぼすべく、

これら三方面の建設工作は、相互に密接な關係があつて、どれからでも便宜着手すればよいと云ふ。

この建設工作要綱は、定縣のそれと大同小異であるが、支那の文化・社會の基礎的特徴が人對人の關係の調節にありとする立場から、經濟工作に合作、政治工作に自治と云ひ、何れも人對人の關係を重視するのが特徴であり、殊にあらゆる建設工作の基礎は、前述知識階級の回郷により、農村に禮俗を興すことにありとして、次の如く云ふ。曰く、禮俗の鄉村建設に對する意義は至重で、不良の習俗を除去せねば建設を阻害するし、よい習俗が成立せねば建設を推進し得ない。合作と云ひ、自治と云つても、従前の疏離散漫な社會では駄目で、人と人との關係を調整せねばならぬ。そして、そのためには道を要するが、この道は法律ではなくて、禮俗たるべく、呂氏鄉約その他が參考にならう。蓋し、法律は西洋に、また都市には行はれやうが、支那農村の郷黨の間には行はれず、また行ふべきではないからと。

また云ふ。支那は元來國家たらざる國家であり、政治なきを政治の理想とするから、農村建設も、禮俗を興すことを始め、すべて自治的に自然に實現せしむべきである。上から命令される建設には、農民は疑惧し態よく避けやうとするからと。

## 五

上來述べ來つた梁漱溟の根本思想及び建設方策に對しては、單に反動的であると貶す人々を暫く問題外としても、相當尊重すべき批評がある。例へば、既掲の千家駒は、

(一) 梁は農村或は農民と一口に云ふが、土地分配の不均等の結果、農民には著しい階級分化があり、各階級の利害は一致しない。

(二) 合作・自治・教育何れの組織も、所謂土豪劣紳に掌握され、何ら農村の改善に資せず、單に既成勢力擁護の手段たるに過ぎないであらう。

(三) 禮俗を興す云々は、民は由らしむべく知らしむべからず流の陳言と變らぬ。

などと云つてゐる。<sup>9)</sup>更に、根本的には人生に關する三問題、これに對する三態度の區別、或は農村建設を國民經濟發展の基礎とする見解なども吟味を要し、輕々には首肯され得ない。

併し、農村自體に對する對策としては、支那の文化社會に對する根本的な理解と、農村の實情に即した觀察とを基礎とし、かなりの妥當性を持つものではあるまいか。農村内部の階級分化に眼を蔽ふのは、缺點とも云へるけれども、支那農村はこの矛盾を藏しながら、世界にも類の少ない組織力と生活力とを保持して來たのであるから、當分これには觸れず、村落内部の自然的な落着に任せてよいのでないか。梁漱溟の思想並に農村建設方策を概略紹介する所以である。

9) 北海所見紀略(中國民族自救運動之最後覺悟、p. 288)。

10) 千家駒、前掲(p. 45 ff.)